

# 研究の概要

## 1 研究主題

豊かな学びを育む学習活動の工夫

## 2 主題設定の理由

本校では、これまで確かな学力の形成をめざして、平成17年度、18年度と『豊かな学びを育む学習活動の工夫』を研究主題に掲げ、研究を進めてきた。

その成果として、子ども同士が学び合う態度や姿勢が育ち、協同的に学ぶ姿が多く見られるようになった。また、教師自身も子どもや同僚に学び合う視点に立って研修を深め、教師として育ち合おうとする関係が培われてきた。

子どもたちが主人公となる未来社会は、高度な知識や文化、情報や対人サービスによって経済が形成される社会へと移行していることが予想される。製造業に携わる労働者の比率も激減するとみられている。子どもが社会人となる21世紀の社会は、知識が高度化し複雑化する社会であり、その知識も絶えず流動し、発展する社会である。

この社会変化に対応して求められるのは、創造的思考や、コミュニケーション能力、探求的な学びである。

学校においては、学びの量ではなく、質が問われているのであり、生涯にわたって学び続ける人間の育成が要請されている。

新しい学びは 座学の学びから 活動的な学びへ  
個人的な学びから 協同的な学びへ  
獲得し記憶し定着する学びから 探求しふり返り 表現する学びへ  
  
伝達し説明し評価する授業から 触発し交流し共有する授業  
へと転換していかなければならない。

活動的な学びとは、モノとの対話、人との対話、自分との対話を組織する学びである。

協同的な学びとは、相互に与え合い、分かち合う、協同的な学びである。

表現する学びとは、お互いの思考や感情を安心して交流し合い、よく聴き合う学びである。

豊かな学びとは、子どもたちが対象と出会い、自分の力で考え、自己と出会うこと、また、表現し合い、他の人の考えや思いを感じ取り、互いに対話しながら共に学ぶことで育まれていくものとする。豊かな学びを育む豊かな対話は、まさに相手や対象を尊重し、謙虚に聴き合う関わりを創り出すことに他ならない。

そこでは、進んで学び始めるような、楽しく、価値ある活動が展開されなければならない。また、共に学び、互いのよさに気づき、認め合い高め合う学習を作っていくことが必要であろう。このような学習活動が、「豊かな学び」を育むと考え、本年度も本主題を設定し、研究を続けてきた。さらに、子どもの学びの質を高めることを目指してきた。

### 3 研究仮説

対話する活動があり，友達との教え合いがあり，表現し合い聴き合う授業づくりをめざすことで，豊かな学びを育むことができるのではないか。

### 4 研究の進め方

- (1) 個人の研究テーマに基づいて研修を進める。
- (2) 全員が授業提示をし，授業研究会を行う。
- (3) 授業のなかで異学年との交流を積極的に行う。
- (4) 豊かな学びの創造につながる有効な手だては何かを模索し，それぞれが授業のなかで方法論を提示し，研究しあう。
- (5) 授業研究や日常の学習活動の実践において，子どもの変容をとらえ，学年研究としてまとめ，『研究のあゆみ』を発行する。

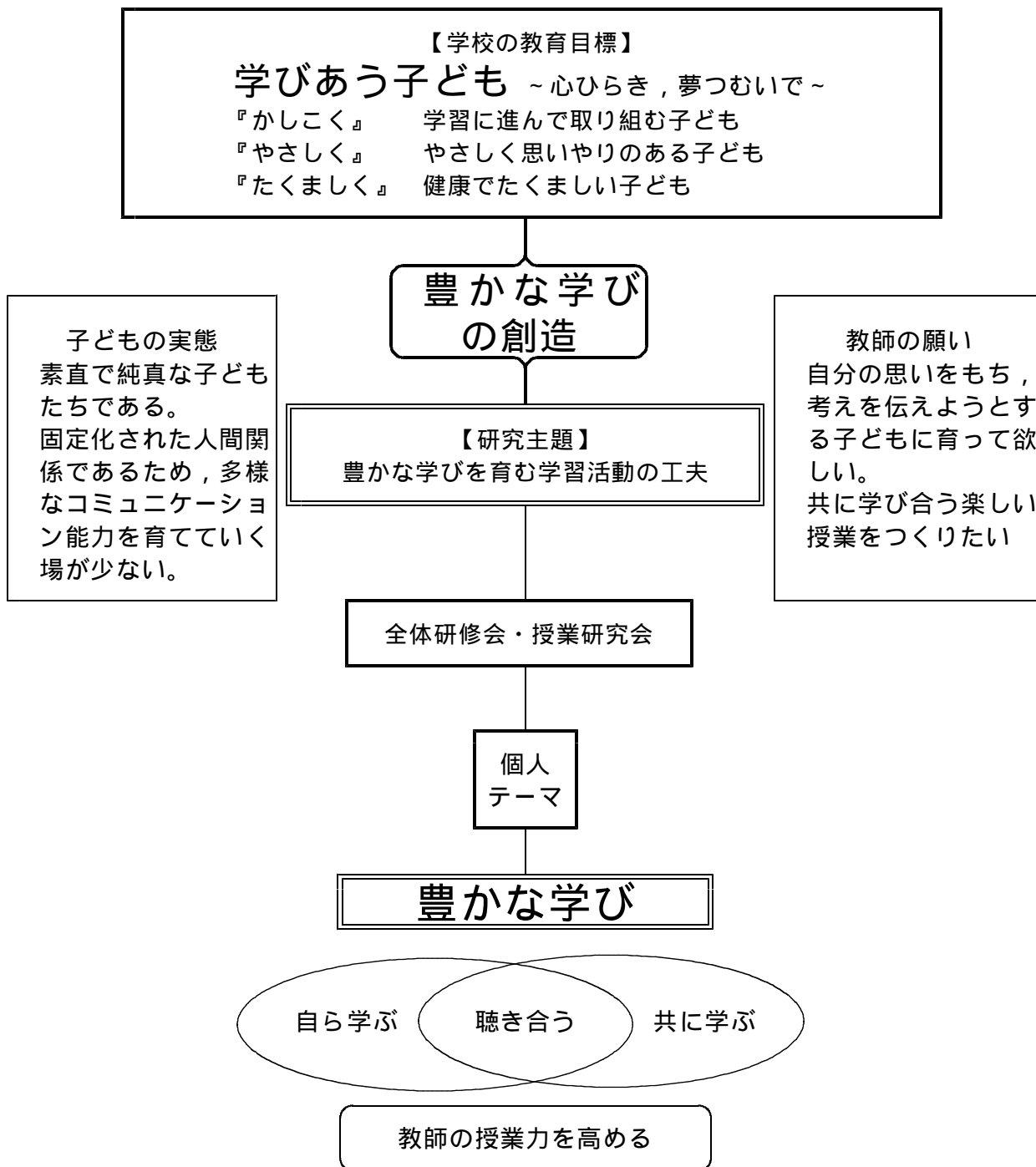
### 5 授業研究会のもち方

- (1) どこで子どもの学びが深まったかを話題にする。
- (2) 協同的な学びが成立していたかについて話題にする。
- (3) 授業を見て，自分自身が学んだことを話題にする。
- (4) 話し合いにおいて，参加者は必ず発言をする。

### 6 研修の歩み

月	校 内 研 修 内 容
4	今年度の研究に向けて 研究主題および研究概要の決定 授業研究会のもち方について 個人テーマの決定 各教科等経営案の作成
5	先進校視察 指導者来校 5 / 2 9 校内授業研究会（5月～2月）
6	道徳「学級における指導計画」作成
7	指導主事計画訪問
8	個人研修
9	評価研修会
11	指導者来校 1 1 / 1 9
12	「研究のあゆみ」の作成計画と分担
2	「研究のあゆみ」の原稿執筆と校正 全体研修会 今年度の研修の反省
3	全体研修会 来年度の研究について

6 研究構想図



7 研究のまとめ

今年度は国語科, 算数科, 家庭科の授業提示がなされた。教科が異なっても, 教師も子どもも人との関わりを大切にしており, 子どもたちの中に共に学んでいこうという意識が培われていることが確認できた。また, 考え合う, 聴き合う場面が多くなり, 熱心に学び合う姿が見られるようになった。同僚性を築いて教師集団として協力し, 認め合うことができた。

しかし, 自力解決の時間の確保を大切にしたい意見や, 協同的な学びを必ずしもグループ学習の場に設定しなくともよいという意見も出されるようになった。学びの質をより高めていくための教師側の手立てを研修していく必要が感じられた。